様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2016
課題番号：２４５１０３５８

研究課題名（和文）創造された伝統としてのイギリス文化の価値に関する理論的・実証的研究

研究課題名（英文）Theoretical and Empirical Approaches to Cultural Values Attached to British Culture as an 'Invented Tradition'

研究代表者
渡辺　愛子（Watanabe, Aiko）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：１０３４５０７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、現代において改編・消費・再生産される「伝統的」イギリス文化に付加された諸価値を見出し、そこにどのような「イギリス性（イギリス的特性・イギリスらしさ）」が表象されているかを解釈することによって、現代イギリス社会が包含する特異性を解明しようという試みであった。たとえば、伝統的建築物の改造といった事例からは、伝統のなかにも革新的な要素を盛り込んだ文化がイギリス社会に構築されていることが解明できた。一方、それが海外においてどう受容されているかというイメージの観点から見ると、革新的な部分は鳴りを潜め、依然として伝統的なイメージが先行し、それが国外では好まれ、再生産されていることがわかった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to explore what kinds of values were added to 'traditional' British culture, which has actually been invented, consumed and reproduced by modern society. In the case of restoring a Grade II listed, historic building, for example, it was observed that whereas English Heritage, an organisation responsible for conserving traditional architecture in England, tried to protect its traditional features and values, it also aimed to adjust them to fit contemporary agendas. On the other hand, when I conducted a British image survey of competent Japanese speakers, it was found that Britain and British people were still viewed stereotypically, and old and conservative views were fairly prevalent. It was therefore inferred that identities and values attached to Britishness (or Englishness) conceived and consumed overseas were fundamentally different from self-images created within Britain.

研究分野：人文学

キーワード：イギリス地域研究　イギリス史　イギリス文化史　文化理論　ヘリテージ研究

１．研究開始当初の背景

(1)本研究課題は、イギリスの歴史家 E. Hobsbawm/T. Ranger 編の『創られた伝統』(*The Invention of Tradition*, 1983)という先駆的論集に着想を得たものであり、古くから受け継がれていると思われがちな伝統が、実は比較的新しい時代になって、ある種の意図をもとに人為的につく(創／作／造)られたものであるという認識を前提としている。本研究課題では、この「意図」を現代社会において拡散消失しつつある「イギリス性」堅持への欲求とみなし、そこに根差した人々の意識的･無意識的心理がどのように現代イギリス社会の様相を形成しているか、立体的･多面的な解釈を行おうとするものであった。そこには当然、R. Hewison が *Heritage Industry* (1987)のなかで論じたような美化された過去への固執の念が、さまざまな濃淡を帯びつつ、上に挙げた事例すべてに読み取れると考えた。

(2) 申請者は、文学研究をその出自とするイギリス文化研究論(British Cultural Studies)を初期の研究対象とし、国民･地域アイデンティティの変容を問題意識の基盤に、文学、映像メディア、活字メディア、ニューメディアの研究を行ってきた。近年の関心はおもにイギリス 20 世紀の文化外交史であり、イギリスの国際文化交流機関ブリティッシュ･カウンシル(The British Council)の活動を研究対象として、とくに文化が政治に果たす役割について考察してきたが、研究を進める過程で、イギリスが海外に向けて投影する文化の発信方法やそのイデオロギー性については十分な議論が行えたものの、一国の文化がどのように規定されているのか、あるいはその際同時に伝播される「文化の価値」とはどう推し測ることができるのか、という根源的な問題に直面し、文化の内実をさらに吟味する必要性を痛感した結果、本研究課題にいたった。

２．研究の目的

本研究課題は、現代において改編･消費･再生産される「伝統的」イギリス文化に付加された諸価値を見出し、そこにどのような「イギリス性（イギリス的特性･イギリスらしさ）」が表象されているかを解釈することによって、現代イギリス社会が包含する特異性を解明しようという試みであった。具体的な分析対象として、(1) 伝統的建築物の改造、(2) オークション文化、(3) パフォーミング･アーツ、(4) 文化の海外投影という現代イギリスを構成するいくつかの事象を取り上げる。これらの事例の実証的分析に、先行研究からの理論的考察を施し、さらに「文化」の意味や「価値」判断の意義といった、現在のアカデミアにおいて解釈の分かれる問題にも再考を加えたいと考えた。

３．研究の方法

(1)文化の価値に表象されると申請者が仮定する「イギリス性(Englishness/Britishness)」については、先述の Hobsbawm ほか、L. Colly, S. Collini, P. Burke, A. Green, A. Easthope らが歴史学（思想史･文化史を含む）と文化理論の分野から秀逸な考察を行っていたが、これらは基本的に国内への視線であったため、文化が海外に投影されるメカニズムを知るうえで、A. Iriye, J. C. E. Gienow-Hecht,平野健一郎らによる国際文化論が基礎的議論を展開していたことに注目する必要があると考えた。

(2)また、本研究課題では、文化を R. Williams が提唱した「人々の生活のあり方全体(a whole way of life)」に基づくものであると認めたうえで、さらには 19 世紀的エリート主義に基づいた「高級芸術(high arts)」としての文化**のあり方も排除することなく、むしろこの従来的**な文化の定義が現代においてどのような役割を果たすのかを考察**の重要要素とした。とはいえ、そのとらえ方は** 19 世紀的見解とは異なる。すなわち、高級芸術という文化形態を静的で自己完結したものとはみなさず、そこから除外されるほかの文化同様、ある種の言説のなかで変容を遂げ続けるもの、経済的観点から言えば、生成･消費･再生産されるものととらえ、その変化の動的プロセスに注目した。以下では、分析対象となる 4 つの事例から問題提起を行った。

①伝統的建築物の改造――「生活のあり方」を揺るがす物議： 2010 **年、イギリス政府は、イングランドの緑化地帯**(greenbelt)**の開発を開始した** 1960 **年代以降、はじめての大変革を示す「田園と景観に関する政策**(National Planning Policy)**」を発表した。ヨーロッパで最悪というこの国の慢性的住宅不足を解消するためである。これに対し、イングリッシュ・ヘリテージ**(The English Heritage)**やナショナル・トラストは、この政策転換が、イングランドの景観や村民のアイデンティティを破壊するとして異論を唱えていた。したがって、ここでは、今回のイギリス政府の決定を前に世論を二分しているイギリス社会の実状を調査する必要性を見た。**

②オークション文化――「生活のあり方」

に根差したビジネス志向：イギリスのテレビ番組にはアンティーク関係の番組が放映されない日はないほど、人々のアンティーク熱は根強いが、同時に気が付くのは、たんに特定のアンティークの真偽や評価額への関心が高いだけではなく、実際の金銭取引を通じての利潤追求行為が常態化していることであった。そこで、芸術品、日常雑貨から不動産までを取引するイギリスの代表的なオークション・ハウスを取材し、オークション文化に見られる人々の価値観や過去とのかかわり方について考察を目指した。

③パフォーミング・アーツ――「生活のあり方」を支える過去礼賛：「パフォーミング・アーツ(performing arts)」とは、一般にオペラ、クラシック音楽、バレエ、演劇を指し、広義には映画やテレビドラマがここに含まれるが、20 世紀に(ニュー)メディアが活字メディアを凌駕して以降、これら映像メディアのオーディエンスに与えるインパクトは計り知れない。ここでは、人々の過去への憧憬の念を反映して高い需要を保持していると考えられる、いわゆる「コスチューム･ドラマ」(時代劇) に焦点を当て、舞台演劇、映画、テレビで脚色･再生産される正典的(canonical)作品のなかに、どのような文化的･商品的価値が存在するのか、そこにオーディエンスがなにを求めているのかを考察した。

④文化の海外投影――他者の目から見た伝統的イギリス文化のかたち：イギリスの日本における代表的文化事業として、在日本イギリス大使館やブリティッシュ・カウンシルを後ろ盾に大々的に開催され、経済的成功を収めた 1998 年の「UK98」（日英修好通商条約締結 140 周年記念祭）や「UK-JAPAN2008」（同 150 周年記念祭）が挙げられる。そこで、これらふたつの大型文化事業において、イギリス・日本の主催者側がイギリスに関するどのような側面を売り出そうとし、参加者側がそこからどのようなインパクトを得たのかアンケート調査を行い、イギリス文化の海外における受容を探ることを試みた。

４．研究成果

(1)2012 年度：

この年度では、『伝統的建築物の改造～「生活のあり方」を揺るがす物議～』を研究テーマとし、伝統的な田園風景(landscape)および建築物に関する現代的意味と、これを保守・提唱しようとすることで生じる現実的な都市計画や住宅問題からどのような問題が表出しているのかを考察することに主眼をおいた。具体的には、現在の田園風景に林立する一般住宅と、改造が施される伝統的建築物（おもに Grade II レベル）に関する二次文献を読み進め、新聞や政府刊行物などの一次資料から、現状把握に努めた。

夏季の出張では、イギリスのロンドンとケンブリッジにおいて、資料収集・研究と学会出席を行い、研究課題への理解が深めた。一方、実際に改築許可を得て Grade II 建築物にモダンな外装を加えることで事業を行っているヨークシャーの‘Hellifield Peel Castle’の所有者とのインタビューを予定していたものの、双方の日程調整がつかず達成されなかったことが残念であった。

そのほか、研究年度 4 年目に予定している『文化の海外投影――他者の目から見た伝統的イギリス文化のかたち』調査の一環として、「日本人（正確には日本語話者）のイギリスに対する印象（ステレオタイプ）」を探るため、アンケート形式のウェブサイトを立ち上げた。この年度の時点では、いまだ統計の集計に値するほどのサンプル数は集まっていないが、このアンケートを研究期間である約 5 年間募ることでかなり実態のある結果が得られることが想定された。

(2)2013 年度：

この年度では、「オークション文化――「生活のあり方」に根差したビジネス志向」を研究テーマとし、イギリスにおける「アンティーク熱」がいかにして生まれ、現代にいたるまで増幅・拡散しているのか、そのメカニズムを解明することに努めた。本テーマに着手するのと同時に、昨年度予期せぬ事態によって遂行が遅れた「伝統的建築物の改造」に関するテーマを継続研究した。すなわち、イギリスにおける建造物およびそれをとりまく景観を中心とした文化遺産（ヘリテージ）の研究・調査を行うこととした。大英図書館ではおもに、監督省庁である環境省 English Heritage の資料を閲覧した。また、サセックス州にあるイーストサセックス公文書館において、Grade II 建造物についての資料収集を試みたが、特筆すべき問題点は発見できず、文化財としての価値だけでなく商業的価値との絡みとして考える際には、やはり、ヨークシャーにある Hellifield Peel Castle について調査する必要性を強く持つにいたった。サセックスにおける関心は、むしろ景観の美しさで定評のあるサセックス州が最近まで国立公園に選定されなかった所以であり、その後のロンドンにおいても、継続してこの点について研究・考察を行った。

一方、研究年度 4 年目に予定している「文化の海外投影――他者の目から見た伝統的イギリス文化のかたち」の分析に先立ち、初年度に立ち上げた「イギリス・イメージ調査」のウェブサイトでは、研究代表者自身が接する機会の多い大学生を中心とした若い世代の回答数が顕著であることがわかった。

この段階での問題点は、初年度のテーマ「伝統的建築物の改造」を考察するうえで調査対象としていた ‘Hellifield Peel Castle’ とのインタビューが実現できていなかったことであり、これを踏まえ、現地調査ではなくメディア表象の分析など、アプローチ方法を変更することにした。

(3)2014 年度

この年度の目的は、「パフォーミング・アーツ――「生活のあり方」を支える過去礼賛」であり、人々の過去への憧憬の念を反映して高い需要を保持していると考えられる、いわゆる「コスチューム・ドラマ」（時代劇）に焦点を当て、舞台演劇、映画、テレビで脚色・再生産される正典的(canonical)作品のなかに、どのような文化的・商品的価値が存在するのかを考察することであった。当初は文学作品の映像化に関心があったが、その後、近年ヒットを続ける BBC のテレビシリーズ *Downton Abbey* 人気に見られる歴史認識と過去想起の問題を考察中である。

9 月に 2014 ISCAL (International Symposium on Culture, Arts and Literature)という国際学会において、「伝統的建築物の改造」に関わるテーマで学会発表および研究論文の刊行を果たすことができた。‘Hellifield Peel Castle’ については、先方との交渉に時間がかかったもののインタビュー日程で結局折合いがつかなかったことが時間的なロスであったが、最終的には、一次・二次資料を駆使して論文を刊行することとした。

(4)2015 年度

この年度は、「文化の海外投影――他者の目から見た伝統的イギリス文化のかたち」をテーマに、日本におけるイギリスのイメージがいかなるものかを解明することを目的とした。その手段として、本研究課題採択の 1 年目より立ち上げていたウェブサイト「イギリス・イメージ調査」において募ってきたアンケート回答を分析した。今回はこれまでの調査結果の概要をもとに分析手法に関する問題点や調査そのものから見えてきた課題を提示し、必要であれば方向修正を行って最終報告書に生かすべく、中間報告を執筆した。

集計結果から見えてきたいくつかの特徴は、日本におけるイギリスへのイメージは、たとえばブリティッシュ・カウンシルが 1999 年と 2000 年に行った‘Through Other Eyes’（以下、TOE と略記） および 2014 年の‘As Others See Us’ と大きく異なるものではなかったものの、一昔前と比べて「多文化社会」としてのイギリスのイメージが浸透してきたようであった。また、調査中とくに興味深かったことは、イメージの抱き方というものは一元的なものではなく、大まかに分けて「醸成されてきたイメージ」と「事件や契機がもたらすイメージ」の相対するかたちが存在するということであった。本調査を行う際、時勢やトレンドに大きく左右される、このように可変的で不安定なイメージの解釈にはつねに注意を払っていかなければならないことを痛感した。

(5)2016 年度

前年度に引き続き、日本におけるイギリスのイメージがいかなるものかを考察する作業については、2017 年 3 月まで当該ウェブサイトを開設し、最終報告書を執筆すべくデータを解析した。とくに、前回の中間報告で省略したイギリス連合国内における国／地域の差異について、他者がどれほどの認識を持っているのかなど、多種多様な問いを多角的に分析する必要があることから、慎重な作業を要した。また、前回の中間報告からわかった「イメージの抱き方」の多重性については、今回も重要なポイントとして考究中である。これは「醸成されてきたイメージ」と「事件や契機がもたらすイメージ」の共存状況のことを意味しているが、時勢やトレンドに大きく左右される後者のイメージについては、それがいかにして個人のなかで主要なイメージ、あるいは「偏見」へと変容していくのかに注目しながら、最終報告書を完成させる予定である。本調査の最終目的は、イギリスの対外文化政策がイメージ調査をどのように活用し自国のイメージ向上に役立てていったのか、その戦略と成果を探ることであった。

情報のソースがますます多様化・複雑化するなか、イメージのような抽象的でつかみどころのないものからヒントを得、実体のともなった政策を立案することには多くの困難がともなうことが予想されるが、「ソフト・パワー」の有効性が満を持して顕在化しはじめた 21 世紀の現在、本調査を継続することで、そうした難題になんらかの解答を見出していきたい。

本研究課題を通じ、とくに国内と海外での伝統的なイギリスのイメージに大きな違いがあることが判明した。たとえば、伝統的建築物の改造といった事例からは、伝統のなかにも革新的な要素を盛り込んだ文化がイギリス社会に構築されていることが解明できた。一方、それが海外においてどう受容されているかというイメージの観点か

ら見ると、革新的な部分は鳴りを潜め、依然として伝統的なイメージが先行し、それが国外では好まれ、再生産されていることがわかった。

なお、「創られた伝統」という本研究課題のテーマについてここ数年研究を進めるうち、イギリスに古くから根付く階級制度が「創られた伝統」としての階級意識を再生産していくことに改めて気づかされた。そこから逆説的に見えてくるのは、そうした固定観念から零れ落ちてくる新たな階層意識といえる「ミドルブラウ」層の存在である。ミドルブラウ研究は近年やっと注目されるにいたった新たな分野であるが、本研究課題を通じてこの研究に向き合うことができたのは大きな収穫であった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

① 渡辺愛子, 牟田有紀子「イギリス・イメージ調査 最終報告」(PDF 公開版)〔2017 年 7 月刊行予定〕

② Aiko WATANABE, Peter ROBINSON, '"Heirs to the World's Culture": English Literature in the *Moscow News*, 1939-41', *Japanese Journal of European Studies* (Waseda University, 2017), vol. 5, pp. 22-33.

③ 渡辺愛子「イギリス・イメージ調査 中間報告」,『多元文化』(早稲田大学多元文化学会紀要, 2016), 第 5 号, pp 61-80.

④ Aiko WATANABE, 'Creative Custodians: English Heritage's New Approach to Conserving English Heritage', *Japanese Journal of European Studies* (Waseda University), vol. 3, pp.112-24.

⑤ Aiko WATANABE, 'The Politics of Exhibiting Fine Art in the Soviet Union: the British Council's Activities 1955-1960', *The East Asian Journal of British History* (2014), vol. 4, pp. 61-90.

⑥ 渡辺愛子「イギリス文化政策にみられる Englishness/Britishness ～予備的考察～」,『多元文化』(早稲田大学多元文化学会紀要, 2014), 第 3 号, pp. 46-81.

⑦ 渡辺愛子「60 年代ポップ革命 ～ビートルズとイギリス社会のヘゲモニックな関係～」,『多元文化』(早稲田大学多元文化学会紀要, 2013), 第 2 号, pp. 166-85.

〔学会発表〕（計 3 件）

① Aiko WATANABE, 'A Grand Design for/by English Heritage: the Ideals, Processes and Touristic Impact of Restoring a Scheduled Ancient Monument', 2014 ISCAL (*International Symposium on Culture, Arts and Literature*, at ANA Crowne Plaza Hotel Grand Court Nagoya, Japan on 9 September 2014).

② 渡辺愛子「イギリス文化政策における Englishness」（北海道大学高等教育推進機構, 2013 年 3 月 13 日）

③ 渡辺愛子「戦後のイギリス社会におけるロックとポップの政治学」於：多元文化学会第 2 回大会「文化論入門としてのポップ･カルチャー ～多元文化のなかで～」(早稲田大学, 2012 年 6 月 2 日)

〔その他〕

ホームページ等

渡辺愛子「イギリス・イメージ調査」：
http://www.f.waseda.jp/aiko/

６．研究組織

(1)**研究代表者**

渡辺　愛子（Aiko WATANABE）
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：10345077